

他言語が紡ぐ 「世界とのつながり」

言語の本質とは、語学がもたらすものは何か。

NHK英会話番組の講師を長く務め、コミュニケーション教育の専門家である松本 茂教授と25の言語を駆使し世界の辺境を巡るノンフィクション作家の高野秀行さんに伺いました。

PART 1

言語によって思考は深まり、
人と人との関係は築かれる

コミュニケーションとは そこに「ある」もの

よく、「英語はあくまでツール」と言われます。「大切なのは、英語を使って何をするか」ということなのはわかりますが、個人的には少し引かかるフレーズです。言語とは単なる道具やスキルではなく、もつと奥深いもの。思考や感情を紡ぎ、人と人との絆を深めるものだと考えているからです。実際、外国語に触れると、日本人同士の会話では発想し得ないことも含め、さまざまな意見に出合います。特に英語は、話者の数も人種も多く、発信される情報量が桁違いであるため、多種多様な側面から物事に触れることになり、思考を深めることができます。これが私が思う、言語を学ぶ一つの意義です。

もう一つの意義は、他者との関係性を築き、つながるために必要な媒介だということです。

それについて述べる前に、「つながる」とはどういうことか、私の専門であるコミュニケーション学の立場から補足させていただきます。コミュニケーションとは「とる」ものではなく、「ある」もの、という捉え方です。

例えば、私の講義中、前の席に座る学生は熱心に耳を傾け、ときおり質問もする一方、後ろの席の学生はスマホをいじっているとしています。そのとき私は前の席の学生とだけつながっているかといえば、そんなことはありません。後ろの席の学生も、スマホを使うという行為を通して「授業内容が難しすぎかな」「やめるよう注意すべきかな」と私に考えさせるなど、影響を与えているからです。つまり、ある空間を誰かと共有している限り、意識的・無意識的にかかわらず、また浅い・深いという程度の差はあっても、そこに関係性は存在しているのです。その意味では、あなたが外国

東京国際大学
言語コミュニケーション学部 教授
松本 茂さん

まつもと・しげる ●1955年生まれ。専門はコミュニケーション教育学。マサチューセッツ大学ディバートコート、東海大学教授、立教大学教授(現名誉教授)などを経て2021年4月より現職。「おとなの基礎英語」ほかNHK番組(Eテレ、ラジオ)への出演多数。現在「中学生の基礎英語レベル2」講師。全国高校英語ディバート連盟(HEnDA)副理事長。東京都英語村(TGG)プログラム監修者。





国際色豊かな東京国際大学キャンパス(埼玉県川越市)には、留学生の出身国の国旗が並ぶ。

もちろん、母語ではないため、英語で会話をすると、言いたいことがうまく伝えられないものどかしさも感じます。そうした感覚は、反対の立場に置かれた人に思いをはせることにもつながります。来日して日が浅い留学生はもちろん、日本に定住しながらも日本語を不自由にしている人は大勢います。そうした人たちが日々感じている、言いたいことをうまく表現できない辛さは、英語でうまく意思を伝えられない辛さと同じはずですよ。

趣味から始める英会話 英語デイベートにも期待

「つながり」という点で言えば、ICTの普及によって世界中の人とつながることが可能になりました。私の趣味は釣りですが、日本にいながらYouTubeにアップされる世界中の釣り動画を楽しんでみますし、SNSを通じて米国の釣り仲間とも交流しています。英会話の学習も、趣味から入るといいでしょう。野球好きならばメジャーリーグのサイトを閲覧するなど、好きなことや得意なことから始めてみる。専門的な知識があるため、わからない言葉

が出てきても類推できますし、何より、楽しみながら学べます。その際、頭の中で日本語に訳さず、英語を英語のまま理解し、話すことに慣れることが上達への近道です。

学校の授業に関して言えば、大切なのは、教室の中に「学び合う関係性」がつけられていること。「この先生になら、言いたいことを言える」「この仲間に対してならば発言できる」という信頼関係があり、安心して自己開示(の「disclosure」)できることが、会話を伴う学習には欠かせません。そうした環境がある前提で勧めたいのは、4技能5領域を統合した学習でもある「デイベート」です。よく「うちの生徒に英語でのデイベートなんて無理」と言われますが、学習指導要領で同じく明示されている「ディスカッション」よりも易しいと思います。ディスカッションは、みんなの前で自分の意見を表明しなくてはいけないため、多感な時期にある高校生にはハードルが高いかもしれません。一方、デイベートでは、自分の考えをさらけ出す必要はありませんし、論題が与えられるうえ、肯定側・否定側と立場

が決まっているので気が楽です。本心では否定側の立場であると感じている論題に、敢えて肯定側の立場で考えることで、これまでなかったモノの見方ができ、新しい自分に気づくこともあるでしょう。

論題も、初めのうちは「制廃止」など軽めのもので十分です。安楽死合法化や死刑廃止など、生徒によっては難解で関心をもてないテーマを選んでしまうと失敗の素。とはいえ、デイベートには話す内容に関する理解が求められるため、他教科の学びにもつながります。結局のところ、英文が理解できるかどうかは、内容についてある程度の知識があるかどうかとの関係性が強いと思います。本を読み、時事ニュースに触れ、人の話を聞くことで、物事を多面的に考えられるようになるし、読解力も高まります。他教科で学ぶことがすべてが生きてくる可能性もあるでしょう。

多様であることを知り、 同じであることも知る

人間らしい豊かな知的活動を

するために、他者との関わりが欠かせません。日本語しかできない人と比べ、外国語を操ることができる人は、さまざまな情報や考え方を吸収しやすくなり、世界観が広がります。

世界の広さを知る一方で、人はそんなに違うことも実感するはずですよ。几帳面な人もいるし、いい加減な人もいます。良い人もいれば、嘘つきもいます。世界のどこでも同じですよ。表面的には異なる国民性に見えても、根っこは一緒であることにも気づくでしょう。例えば、日本人が海外に駐在する場合、家族を残して単身赴任するケースが多いですが、現地の人には「なぜ家族を連れてこないんだ。愛していないのか」と不思議がります。でも、子育てや受験のことを考えると日本に残した方が子どもへの幸せになると判断しているケースもあります。

家族を愛しているからこそ、片や一緒に暮らすし、片や離れる選択をする。そうした背景まで含め、きちんと説明できる力があれば、人はもっとわかり合えるし、関係性はより深まっていくことでしょ。

人と場を共有した際、英語が苦手という理由で、うつ向いていては、関係性が深まらないどころか、本心とは異なるメッセージを相手に与えかねません。

反対に、「言葉」を介すことで、人と人は、より深い関係性を築くことができます。英語で繊細なニュアンスまで伝えられるようになり、「これを言ったら失礼になる」といったことまでわかってくる。異なる文化をもつ人間同士でも、関係はより深まっていくでしょう。